

が栄養失調になって乳もでなくなり、赤ん坊は火のついたように泣いていた。泣く力のあるうちは良いが、泣けなくなり、収容所では伝染病で毎日死んでいく、そうした中で、二人とも次々とロウソクの火が消えるように息を引き取った。私は主人に言った言葉を思い出しながら、悲憤の涙がとめどなく溢れ、子供と一緒に死のうかと思つたものである。

しかし私は、嫁いだ主人の生家に帰り、主人の出征のことを報告しなければならない。大切な主人の子供を亡くした、この仏様を主人の家に持ち帰って仏壇に収めなければならぬ。

しかし、戦争で負けた日本人に自由はなかった。ハルビンから次々と移動にあい二十八年上海から引き揚げ、故国日本に着いて主人の生家の皆さんに、主人の復員していない悲しみを忘れて、二人の子供を泣くしたお詫びを申し上げて泣いたことを思い出すと、今もとめどなく涙が流れる。

夫、長男、次女、無念の死

東京都 横須賀 房子

私は満州通化省柳河県で終戦を迎えた。四十五年前の八月十五日、重大放送があるから聞くようにと布令がまわったが、わが家のラジオは、ピーピーガーガー、音があるばかりで、何一つ聞こえなかった。

その日から私たちの戦争は始まったのである。いつ何が起るかも知れない、とにかく、いつでも出かけられるように、家の中の整理をはじめた。

牡丹江や新京方面から毎日ぞくぞく邦人が避難してくるようになり、九月にはいって、本人が散らばっていは連絡がとれないということで、九月八日、東関と南関に集結することになった。いざというときに着て行くものやたいせつなものは物盗りがきても安心だからと倉庫の中に入れて釘で打ちつけた。狭いながらも希望をもって床に入ったのもつかの間、東関に行った人達が暴民に

おそれたと部下が知らせにきた。主人はちょっとようすを見てくると言っついでいっしょに出て行き、まんじりともせず一夜が明けた。朝主人が帰ってくるなり一どうもようすがおかしい！暴民がくるかもしれない。もしきても、物盗りで、命まではとらないから、手を合わせて拜んでいるように」と言い残してまた出て行った。間もなく外が騒がしいので出て見ると、下のほうが暴民に襲われて、みんな逃げてきた。私はいそいで一歳の次女を背負い、手あたりしだい一枚でも多く身につけようとしたが、昨夜倉庫に釘づけにしたばかりで何も無い。五歳の長男と三歳の長女の手をひいて外へ出た。外は静かで、先ほどの騒ぎはうそのようだった。今の中にオムツをかえておこうと次女をおろしてオムツ交換をしていたら、ワァーとまた暴民がやってきた。一瞬のできごとだった。気がついたらねんねこもオムツやたいせつなもの等、入れた袋もなくなっていた。

また家に引き返して、毛布を一枚持って広場のほうへ逃げた。笛がピーツとなる。ワァーッとアリの大軍のよう暴民が押し寄せてきた。もう逃げられない。私は広

場の真中に毛布をトにかくして座りこんだ。

終戦直前に各家庭に薪が一丈ずつ配給になったので、どこの家の軒下にも立派な薪が積んであった。薪がどんどん運ばれて行く。ピーツと笛がなると、いっせいに引揚げて行く。またピーツと笛がなる。今度は家財やふとんが運ばれて行く。棒を振りかざしてやってくる。私は主人に言われたように夢中で手を合わせておがんでいた。二人までは通り過ぎていったが、三人目は血相をかえて向かってきた。私は危険を感じて、二人の子どもを抱えこんでうつぶせした。とたんにガァーンと気が遠くなるような一撃で目がくらんだ。ワァーンと長女が泣き出した。これ以上ここには危ない！暴民が引揚げて行ったすきにカボチャのつたがおい茂っている堀の中へ飛びこんだ。またピーツと笛がなり、どんどん薪を運んでいく。あたりに日本人の姿が見えないのに気がついて心配になり、もう毛布なんてどうでも良い、堀からはい出した。はるか二百メートルぐらいの所を日本人が列をつくって行くではないか。下のほうから「奥さん早くおいで」と呼んでいる。いそいで行こうとすると、また後

から棒を振りあげてきた。公安局の兵隊が「もうよせ」と止めてくれたので、叩かれずにすんだ。

やっと列に追いついてしばらく後からついて歩いて行くくと、主人がニコニコしながら反対方向からきた。こらえていたものがぐっとこみあげてきて涙がこぼれた。

「何も持ち出せなかったの」「いいよいよ子ども達は何事もなくてよかった」主人は副隊長と二人で情勢が悪いので、なんとか日本人を救済してくれるよう県公署へお願いに行っていたとのことだった。

一同は並んで県公署に行き、中庭に横列に並ばせられた。その前に銃口をこちらに向けて兵がずらりと立った。ここでみんな銃殺されるのだろうか、恐怖と沈黙の時は流れた。しばらくして、また今きた道を歩かされ、阿片患者を入れる病棟だった建物の中へ入れられた。その晩、三百八十余人は生きた心地はなかった。お握りが一つずつ配給になったが、緊張のあまり、口元まで持っていくと、お腹はすいているのにゲーツとこみあげてきて食べられない。水を一杯もらってやっと流しこんだ。

夜が明けて東の空が白みかかった頃、進軍ラップと

高々と歌う進軍歌が近づいてきた。満系高等学校の生徒達だった。公安隊の人が血相を変えてはいつてきて「お前達の主人は皆死んでしまった」と言う。もうこれまでと思い私は子どもといっしょに死を覚悟した。そのときドヤドヤと男の人達が帰ってきた。

昨晩のお握りは柳河県の奥地五道江から逃げてきた人達がトラックに食糧を積んできたとのこと、炊く釜がないので、主人が一人で街まで買いに行ったのだそう。釜を馬車に積んで帰る途中、中国人に取り囲まれ、「日本人の中に三人悪いことをした人がいるか、その人をわれわれに引き渡せ、渡さないときは他の日本人の命の保障はない」

しかし、前日すでに高等学校の先生が奥さんや子ども目の前で殴り殺されている。主人は「もうすでに一人殺しているではないか、日本人同士としてそんなことはできない、どうか許してくれ」と頼んだが、もし襲撃されたらどんなことになるかわからない。一刻も早く柳河を脱出しなくてはと病人と歩けない子ども連れの人にはトラックに乗り、女、子どもがその後続いた。四キロ以

上の道をどんなことがあっても、何時間かかっても駅まで行くようにと言われ、死を覚悟の行進であった。

ぶじ駅までたどりつき、安堵と疲労でみんな地面に座りこんで汽車のくるのを待った。そのとき中国人の太太（たいたい＝奥さん）が西瓜を売りにきた。みんな一切れずつもらった、あのとときの西瓜の味は今でも忘れはしない。

親日家の駅長さんのはからいで、一車両私たちのためにあけてくれ、省本部のある通化へ向かったのだが、翌昭和二十一年二月三日、恐ろしい通化事件が起こり、主人はじめ、多くの日本人も中国人も犠牲になって死んだ。春になって、ハシカが大流行し、栄養失調から肺炎を併発して、葉はなく、欲しがるリンゴ一つ食べさせることもできず、長男、次女とついに病に勝てず、あいついでこの世を去った。

何をされても抵抗できない、逆らえば殺される。どれほど辛く情けない思いをしたことか、今の若い人達には想像もつかぬことであろう。現在日本は経済大国と言われ、世界的にもめざましい発展を上げている。

平和の有難さを心底かみしめている今日この頃の私である。

夢はるかな旅順

神奈川県 中 沢 京 子

旅順市で終戦を迎えた。美しい山や丘、アカシアの花が咲き、少し汗ばんで歩くと港がある街で、八人家族の長女として、のんびり育っていた。十歳だった。国情を感知していたとはいえ、教職にあった父は敗戦を痛み、落胆した。家族を座らせて理解しがたい口調で話をした。数個の小袋を母がふるえながら受け取り、危機には揃って生命を断つことを教えられた。

ソ連軍が侵入し、生活は激変した。中国人の顔つきがかわり不安だったが、まもなく三つの国「人」としての交流もあった。持ち帰ることが不可能な着物、離人形、琴、父のバイオリンなど、つぎつぎにあげてしまった。ソ連の若い兵隊が大きな靴のまま襲いこんだが、すでに